

# 動物たちと生きる

Abe Hiroshi

絵本作家

あべ弘士

聞き手  
ヴァン編集部

## 自然の中で育った少年時代

**Vent(以下V):** あべ先生は、旭山動物園を退職されてから動物の絵本をたくさん出版していらっしゃいますが、動物に興味をもったのは、どのようなことがきっかけだったのでしょうか？

**あべ:** 生まれ育ったのがこの旭川で、家のすぐ近くの川でみんなとよく遊びました。自然そのままの川で、柳の木がジャングルのように茂っていて、魚やトンボ、カエルなど何から何までたくさんいる。要するに、「自然」と深くつながりのある環境で育ったんです。

**V:** 虫や魚を捕まえることも？

**あべ:** 捕まえることにはあまり興味がなくて、「自然」の中に身を置くことが好きでした。その「自然」の中で静かにしていると、フ

ナやウグイが自分のほうへ泳いできて、カエルやトンボもいて、柳の葉っぱが揺れている…そういう状況に自分がいることが好きだったんです。小学校6年生ぐらいまではそういう感じだったかな。そして町内には子どもがいっぱいで、大人は子どもたちをほったらかしにしていました。

**V:** 何かを「しなさい!」と言われることがなかったのですね。

**あべ:** そう、家に帰ってランドセルを置いたらすぐ外に出て行っちゃうから、親は子どもがどこに行っているか分からない。だからといって危険なことはなく、チャンバラをしてもお互いに制御できているし、お兄ちゃんたちが「やめろ」と怒るからけがをすることも無い。よい意味で子どもどうしの環境があったんです。それに、大人はちゃんと遠くから危険がないか見ているんですね。



○あべ・ひろし  
1948年北海道旭川市に生まれる。1972年から25年間旭山動物園の飼育係として、ゾウ、ライオン、フクロウ、ゴリラなどさまざまな動物を担当する。1981年『旭山動物園日誌』を出版。以後、多くの出版社から絵本を刊行する。1996年旭山動物園を退職し、創作活動に専念する。2009年北海道旭川市美術館にて「あべ弘士動物交響楽」展を開催。その後、全国で作品展開催。講談社出版文化賞絵本賞、赤い鳥さし絵賞、産経児童出版文化賞美術賞など受賞多数。2011年NPO法人かわうそ倶楽部を設立、旭川市にてギャラリープルプルを運営する。

## 絵と工作が得意！

V: 絵を描くのは小さいときからお好きだったのですか？

あべ: 絵は得意中の得意！ それから工作も得意で、小学校2年生のとき、夏祭りの出店にあったスマートボールの台に興味をもって、次の日に同じものを作りました。

V: パチンコみたいなゲームですよ。全てご自分で作られたのですか？

あべ: そう、頭の中でこういうのを作りたいと思ったら完璧に具現化できたんです。親戚が大工やペンキ屋をしていたから、木やペンキといった材料は何でもあって、ただスプリングはなかったから母親から肌着の平ゴムをもらって(笑)、イチから全て作りました。そうしたら、近所の友達がみんな借りにきて、僕はやる暇がなくなりました。

## 合唱に燃えた中学・高校時代

V: 中学校からは、合唱部で活躍されていたとお伺いしました。

あべ: 自然が好きだったので、最初は生物部に入ろうと思っていたんですが、音楽の授業で音程を正しく歌えたことから、音楽の

先生に呼ばれて合唱部に入ったんです。当時、いちばん人気があったのは野球部でしたが、120人受けて5人ぐらいしか入れないから、落ちてしまった人たちをみんなその先生が合唱部に入れた。そうして集まった仲間と一緒に、中学3年間合唱をしました。高校に入ると、友達は柔道やバスケット、野球など体育系の部活に入ったけれど、自分は高校3年生まで6年間徹底的に合唱を続けました。通っていた旭川西高は北海道でもトップクラスの合唱部で、その部長をやっていたんです。

V: そうなんですか！ すごいですね。

あべ: 僕は低い声も高い声も出せないからバリトンでした。バリトンは自分を主張するようなポジションではないけれど、ハーモニーをつくる重要なパートです。全部の音に耳を鋭くして集中し、気配を消して自分の音をすっと入れるんです。ぼんとはまる音を見つるのがすごく難しいけれど、集中してハーモニーに加わるのがおもしろかったね。

V: さきほど自然の中にいるのが好きとおっしゃっていましたが、合唱でもハーモニーの中にいるのがお好きだったことと、どこか通じるものがありますね。

## 百人一首はプロ級の腕前

V: 学生時代は、他にどのようなことに興味をおもちでしたか？

あべ: 小学校1年生から高校3年生まで、百人一首にも熱中しました。精神を集中するという点では、合唱と同じく訓練になりました。北海道の百人一首は、札がカルタぐらいの大きさで5～6mmの厚さの木でできていて、そこに草書体で文字が書いてある。しかも下の句を読んで下の句を取るの、上の句はない。いろはカルタと同じようで、実はなかなか奥が深いんです。冬の旭川では、町内のどこでも百人一首が盛んで、僕たちは家の近くの小さな会館で『巨人の星』の星飛雄馬の父親みたいなおじさんに、特訓に次ぐ特訓を受けました。

V: それは厳しい指導だったのですか？

あべ: すごく厳しい(笑)。句を読み始めたら呼吸せずに、100m走のスタートのように0.001秒ですつといかなきゃいけない。そのときは、自分が空中に浮いているような感覚になるんです。

V: そこまでの集中力は、オリンピック選手のようにですね！

あべ: 百人一首を続けていたことでよかったと思うことが2つあって、1つは僕の書く文章が五七五七七と、百人一首のようにリズムを大切に文章になっていて、それはまさに音楽なんです。

V: あべ先生の絵本は、ぼんぼんとリズムよく読みやすいのが印象的です。

あべ: 無駄な言葉を削ってリズムがいいと、読みやすい美しい。それからもう1つは、自分は百人一首の上の句を知らなかったけれど、知らないことはすてきだということ。なぜなら、知っている

「知ったかぶり」になってしまい、検証しようとしなから。

V: 覚えると、そこまで興味が終わってしまうということですね。

あべ: そう。だから知らないことは恥ではなく、それを解明できる未来があるということ。自分は旅好きで地理や歴史も好きだから、大人になってから上の句で詠まれているいろいろなところに実際に行き、半分ぐらいは上の句の検証をしているね(笑)。今は何でもスマホで検索したらすぐ出てくる。便利といったら便利だけれど、すぐに答えが出るというのは、今言っていることと真逆のこと。旅をするときも、どんな出会いがあるのか最初から分かっていたら、醍醐味は半減しちゃうな。

## 絵は「目」で描く

V: あべ先生と旭山動物園との出会いは、どのようなきっかけだったのですか？

あべ: 動物園に勤める前に叔父の鉄工所で働いていて、そこを辞めて絵を独学で始めたんです。早く技術を身に付けようと思って、自分の左手を描いたり、美瑛や富良野の辺りで風景画を描いたりしていたけれど、絵描きはそう簡単に生活できるわけじゃないから、何か仕事に就こうかと思った。そのときに、「自然」とかかわりのある仕事がよいと思い、当時開園5年目の旭山動物園の門をたたいたのです。

V: 小学校のときの原点に戻ったのですか？

あべ: 1か月後に働けることになり、動物園の飼育係を始めたらこれはおもしろい！ もう絵はどうでもいい、百人一首も歌も、全部どうでもいい！ そうなったら徹底的にやるタイプだから、365日24時間動物だけの生活でした。子どもが生まれても、休みの日には「お父さんは今日疲れたから動物園に行ってくる」って(笑)。背中に「動物命」って書いて25年間過ごしていた感じです。

V: 今でも、旭山動物園にはあべ先生の作品がたくさんありますよね。

あべ: 働いていた当時から動物園で絵を描く機会が多く、ポスターや機関誌、看板まで、予算がなかったから鉄板とペンキだけ買ってもらってずいぶん描きました。絵が動物や自然と融合して、僕のギャラリーみたいになっちゃいました。

V: あべ先生は、動物たちを頭の中で想像して描いていらっしゃるのですか？

あべ: 頭の中というよりは「目」ですね。じーっと凝視して記憶しておく。飼育係が絵描きになったのではなく、絵描きが飼育係になったんです。常に「目」で描いていました。動物や自然をちゃんと知らないと、絵はなかなか描けないと思っていて、例えばキリンは、6mぐらいの高さから頭をなでたり、「まつげが長くてきれいだね」と話しかけて触ったりしていたから、頭のてっぺんから描けますよ。

V: 普通は下から見上げますものね。

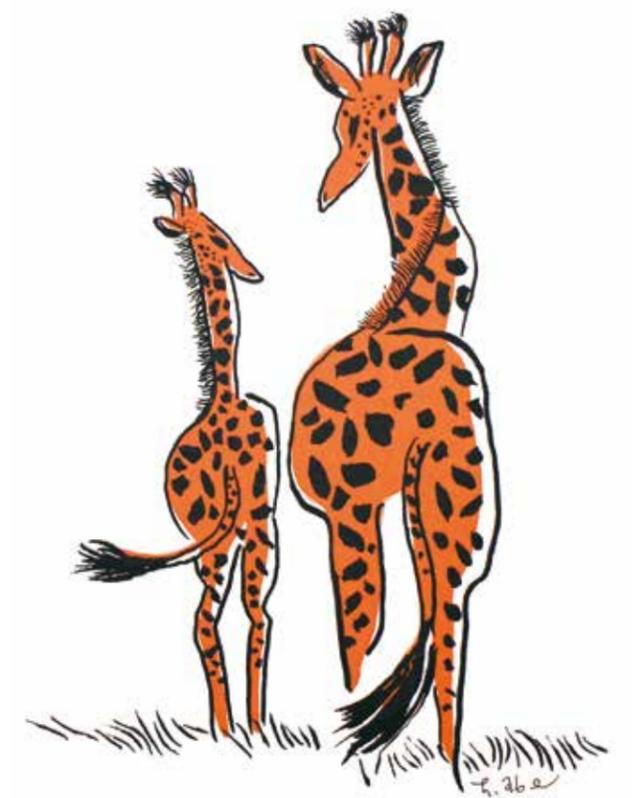
あべ: それからゾウは下にもぐってブラッシングをしていたから、おなかの下から描ける。動物が死んでしまったら解剖もして、それによって毛の流れや筋肉の付き方、骨がどうなっているかが分かかっておもしろかった。動物たちとは濃い付き合いをしていたね。25年間飼育係をして絵描きになったのは、遠回りに見えるけれど、ものすごく近道だったんです。

V: なぜ、そう思われるのでしょうか？

あべ: 飼育係をしている間、絵を描かずに彼らと一緒に生活をして、すうっと彼らの中に入って動物をいろいろ見ていたことによって、絵を描けるようになったと思うからです。

V: 絵描きになりたいという思いをずっと強くもっていたり、絵を描くことを意識して動物をご覧になったりしていたわけではなかったのですか？

あべ: そう、絵だけを25年間ずっと描き続けていたら、どこかで諦めたり挫折したりして、途中で何を描いていいのか分からなくなっていたかもしれない。だから動物園に入って動物の飼育係を25年間徹底的に続けたのは、絵描きになるために必要なことでした。働きながら絵本作りを少しずつ始めていた頃、そろそろ絵描き



『親子のキリン』

を本格的にやろうかなと思ひ動物園を退職したけれど、園長も「お前は飼育係よりも絵描きだ」と背中を押してくれました。

## 動物とともに生きること

V: 動物の何が、あべ先生の心をそれほどまでにひき付けているのでしょうか?

あべ: 動物や鳥、獣は、ごみを出さない。

V: …といますと?

あべ: 動物は排泄をしても、それはごみではない。死体もごみではなく全部土になる。だから、地球にとって害はない。人間だけが、自然を制御しようと思ったときからごみを出す。人類は「美」と「醜」を併せもっていて「醜」もいっぱいもっているでしょう? 動物に「醜」はない、全てが「美」なんです。

V: 動物は人間のことをどう思っているのでしょうか?

あべ: 「隣人」だと思っているんじゃないかな? 「友人」とは思っていないだろうね。以前北極に行ったとき、セイウチがものすごく近くに寄ってきたけれど、30年前は人間を見たら逃げてしまったそうです。今は禁猟になって人間は何もしないと分かっているから、ずいぶん寄ってくるようになった。結局、全ての責任は人間にあるんです。

V: 人間が自然を壊していたということですね。

あべ: 私たち人間と動物たちとの付き合いで大事なものは、干渉しない、環境を整える、そして観察をする。これは動物園で25年間働いて気付いたことです。飼育係がライオンをなでたらお客さんは喜んでくれるけれど、ライオンはなでてもらいたくないし、干渉してほしくない。環境を整えるのは、お金もかかるしすごく大変だけれど、それは人間が労力を捻出すればよい。さらに、動物たちの健康状態や行動をよく観察しないと飼育係は務まらない。でもそれは干渉ではありません。この3つを考えると、今の大人は子ども

たちに対して干渉する、環境を整えない、観察しない。全て反対のことをしていると思います。

## コミュニケーションがあって、芸術がある

V: いろいろな種類の動物が同じ世界で生きています。その中で動物どうしはどのようなコミュニケーションをとっているのでしょうか?

あべ: コミュニケーションは動物の種によって大きく異なっていて、群れの動物と単独の動物を混ぜて考えるのは難しい。例えば、ニホンザルは群れで生活するからコミュニケーションがないと成り立たない。人間も群れ社会なので、同じです。一方、哺乳動物では、実は単独生活の動物のほうが多く、クマやヒョウ、トラ、サイ、リスなど、みんな単独なんです。よく動物園でヒグマを一頭で展示していると、「独りぼっちでかわいそう」と思われるけれど、実はヒグマは独りが好きなんですよ。

V: それが自然なのですね。

あべ: サルや人間にとってコミュニケーションは大事であり、否定してしまうとよくない。人間がなぜ人間かということ、言葉をもっていることと家族があるということ。これがとても重要で、今はスマホなどでコミュニケーションがどんどん少なくなってしまって、言葉や会話というものを否定しているような気がします。

V: 今の人間は、どちらかというと単独の動物に近い生活をしているのでしょうか?

あべ: 特に都会ではそういう感じがするね。スマホはツールとしては便利だけれど、それを越えた新たな“種”になってきていて、今後人工知能が出てくるとさらに危惧すべき状態になってしまうのでは? 人間は言葉を獲得したからこそ、ここまで発達したのです。自分は絵描きなので、「動物たちの中に芸術はあるのか」とよく考えます。音楽については、チンパンジーもダンスをするし、古

代人類も、石や木などを打楽器にして自分の心を高揚させたり、相手の心に勇気を与えたりといったことをしていた。では絵はどのようなかということ、言葉がないときには絵は生まれえないと思うんです。アルタミラの洞窟でバッファローを描いた大昔の人類も「かっこいいな」と思って描いたのでしょう。その言葉があるから、絵という芸術が生まれたと思います。

V: なるほど。

あべ: 春の絵を描くときに、「春」とは何か? と考えます。僕がいちばん春を感じるのは「光」で、その次が「色」。冬には雪が積もるから色がないけれど、その中からいちばん最初に色を見つかるとうれしくなる。日本人は非常に繊細な色彩感覚をもっていて、たくさん色の名前があるので、ずっと遠くの川辺の柳が一直線にすーっと色づくとき、あの色は何色だろうか? 淡い緑色で、萌黄色なのか浅葱色なのか…そういうふう言葉からつながっていくのはおもしろいです。

V: 「伝えたい言葉があって絵がある」。今おっしゃった情景からすごく実感できます。

あべ: 特に日本は言葉の国なので、それを強く感じます。日本は四季が豊かで、そこに言葉がハーモニーになる。好きですね。

## たくさん感じることから全ては始まる!

V: 最後に、読者の方にメッセージをお願いします。

あべ: やはり、大人は子どもに干渉せず、環境を整えて観察をしましょう。それに、子どもの興味が次から次へとどんどん変わっていても、あまり心配することはないです。子どもは、さまざまなものに興味をもち、いろいろな体験をすることによって、そのうち自分のいちばんやりたいことが見つかる。だから子どものうちは、何にでも興味をもって、音楽でも絵でも運動でもたくさんを経験してほしい。そして大人に近づいたら、たくさん食べて栄養を

付けるのと同じように、旅に出たり、音楽を聴いたり、落語や歌舞伎を見たり、友達と遊んだり、けんかをしたり、そういうことを通していろいろなことに興味をもって自分の心を磨いてほしいと思います。

V: 精神を育てる栄養となるのですね。

あべ: 音楽でも、よい演奏をするためには、自分の魂がどれだけ豊かであって、そこから醸し出される技術とどうコラボレーションするかが重要だと思います。それは絵を描くときも同じで、頭の中の精神が豊かじゃないといろいろなことが描けないのです。まずは本を読むこと! 本は古今東西いろいろなことを教えてくれるから、いちばん大事です。



\*p.6・7の写真は、あべ弘士先生が運営する「ギャラリープルプル」(北海道旭川市)にて撮影。

# 授業者に訊く—①



今回の「授業者に訊く」では、1・2ともに発表する機会を絡めた内容をお届けします。小学校は、研究大会での『シング・シング・シング』全校合奏を取り上げます。全体での合わせは3回にもかかわらず、ピシッと演奏が決まる指導方法について伺いました。

授業者：庄司こずえ（武蔵野市立第一小学校）

## ふだんの授業で基礎・基本を徹底

**Vent(以下V)**：今回は2017年1月20日に行われた「東京都小学校音楽教育研究会第59回研究大会中央Aゾーン大会」の研究演奏をもとに、先生のふだんの授業や吹奏楽活動での取り組みについて伺います。先生は何年生から指導されていますか？

**庄司**：2年生からです。

**V**：先生のご指導の特徴はどのようなところでしょうか？

**庄司**：教科書全ての教材を扱って、基礎・基本を全員に身に付けさせることです。時

間の都合で省くと、あとで苦勞します。それほど教科書は発達段階や系統性をよく考えてできています。2年生は音楽の時間が多いため、手拍子の活動などは何度も繰り返し行います。そうすると拍子感が身に付きフレーズ感も生まれ、高学年になったときの力になります。

**V**：教科書の曲で子どもの反応がいまのときは、どのように工夫されますか？

**庄司**：教材研究をします。たとえば2年生の『どこかで』は、ただ歌うだけなら飽きてしまうかもしれませんが、何度も輪唱していくと、子どもたちが気持ちよくなって喜んで歌うようになりました。単純な教材でもこちらの扱い方で深くなります。「この教材で何を身に付けさせるか」を明確にしています。

**V**：学年ごとに大切にしていることはありますか？

**庄司**：器楽について挙げると、例えば2年生では鍵盤ハーモニカを教科書に書かれている指遣いや息つぎ、タンギングができるようにします。3年生はリコーダーを学習する際、ただ吹いてしまうとオーバーブローで音程が合わなくなるので、ものすご

く単純な曲で息のコントロールをしながら、聴いて合わせることを重視します。4年生では、サミングのときの息のスピードや量、使い方を徹底して指導します。5年生では派生音の運指を覚えて校歌をリコーダーで吹けるようにします。6年生では、『越天楽今様』などを歌う活動の前に、まずリコーダーで音程を取り、正しく歌えるようにしています。大切なことは全員ができるようにするという事です。6年生になって連合音楽会で発表するときも今までの基礎・基本の積み重ねがあるので、時間数が少なくてもその先のことができるということを実感しています。

## 歌唱指導の見直しと挑戦

**V**：歌唱についてはどうでしょうか？

**庄司**：今回、研究大会のときの映像を見たとき、合唱奏の校歌にとってもショックを受けました。校歌は自信をもって歌えればよいと思っていたのですが、やはり地声はだめだと…。歌の指導に対して身の引き締まる思いがしました。勉強になりましたし反省しています。

## 小さな積み重ねが大きな結果を生む

聞き手：ヴァン編集部



○しろうじ・こずえ  
武蔵野市立第一小学校主任教諭

**V**：録音された音源を聴いて、そう感じられたのですね。

**庄司**：管楽器と合わせて合唱奏するならパワーが必要だと思い、堂々と自信をもって歌えたいと思っていましたが、大人数で歌った場合、個性のある声は互いに邪魔をするということを痛感しました。そこで授業では発声練習の一つとして校歌をア・カペラで歌うようにしました。

**V**：ア・カペラですか？

**庄司**：今まではピアノ伴奏で校歌を歌っていましたが、研究大会後は校歌を『コールユーブンゲン』のようにア・カペラで歌わせています。前奏はピアノで弾き、校歌はア・カペラで歌い、最後にピアノ伴奏を入れてみると音程がずれていることが分かって大笑いになります。来年の音楽会までにきれいに歌えるようになることを願いつつ、毎時間が研究授業です。

## 最小の努力で最大の効果を

**V**：研究大会で演奏なさった『シング・シング・シング』は、3～6年生全員の演奏でした。加えて吹奏楽団の子どもたちがそれぞれの楽器で演奏しましたが、どれぐら

いの期間準備されたのでしょうか？

**庄司**：大きく考えると、3年前から始めています。3年前に『シング・シング・シング』を音楽会で演奏したとき、保護者に大変好評でした。皆さん「すごかった」と言ってくださって…。3年後の校内音楽会でも少しバージョンアップしようと思い、コツコツと練習を続けてきました。そのようなときに研究大会のお話をいただきました。

**V**：具体的に授業ではどのようにご指導なさったのでしょうか？

**庄司**：研究演奏をするということが決まってから、吹奏楽団は朝の練習で演奏できるようにしました。授業では最初の5分…または終わりの5分で「今日はこの2小節をできるようにしよう」「次はこの2小節」というように、半年かけてステップアップしました。

**V**：その5分間の内容がどのような音楽になるのか、子どもたちが分かるように工夫

されたのですか？

**庄司**：どのような合奏になるのか最初は分かりません。ジグソーパズルのような状態ですから。でも自分の演奏が『シング・シング・シング』という曲になったときは「おーっ！」という歓声が上がりました。子どもたちもこの曲を格好いいと思っているので、ノリもよく、「最小の努力で最大の効果を上げる」という私のポリシーに合った曲でした。子どもも教師も最小の努力で最大の効果を上げられるように工夫しています。

## 選曲での工夫

**V**：選曲はどのようにされていますか？

**庄司**：最近ではYouTubeでいろいろな演奏を聴きます。ただ難しいのは、学校によって楽器の条件が違うことです。また、『ミッキーマウス マーチ』などを全校演奏する場合、1・2年生に合わせて選曲すると、



イラストレーション：ソリマチアキラ



どうしても高学年のモチベーションが上が  
りません。

**V:** 全校合奏の場合、低学年は多少背伸  
びさせても高学年の発達段階に合わせた  
ほうがよいのでしょうか？

**庄司:** 高学年の心をつかむ曲を選び、1・  
2年生にできることを考えて音を重ねたり、  
挟んだりしていくとみんなが意欲をも  
って楽しむことができます。ただし、いち  
ばん大切なのは調性です。今回の『シン  
グ・シング・シング』はホ短調とイ短調だ  
ったので管楽器にとっては難しい調です  
が、教育楽器には吹きやすい調なので  
うまくいきました。

## 外部講師と連携する

**V:** 吹奏楽活動について伺います。1日に  
どれぐらい吹奏楽団の指導をなさってい  
ますか？

**庄司:** 毎朝7時30分～8時15分と、放課  
後3時45分～5時です。朝は全員集ま  
りますが、放課後は習い事に通う子が多  
いのでなかなか全員はそろいません。

**V:** 他の先生方や保護者の協力体制につ  
いてはいかがでしょう。

**庄司:** 協力がないと活動ができないので、  
1つご協力いただくために倍の仕事をする  
という気持ちでいます。ギブ&テイクでな  
いと、お願いばかりしても協力していただ  
けないし、子どもを参加させてもらえませ  
ん。

**V:** 外部講師の方についてもお聞かせい  
ただけますか？

**庄司:** 吹奏楽団では新入部員が入ってきた  
ときに初心者指導としてパートごとに音

大生に来てもらいます。コンクール前には  
学校を卒業した方にレッスンをお願いし  
ていて、合わせて年間3回です。

**V:** どのような方法で外部講師を探すの  
でしょうか？

**庄司:** 学校に出入りしている楽器の業者  
さんに紹介していただいたり、音大に進学  
した卒業生に小学生を教えてくれる人は  
いないかと問い合わせたりしました。

**V:** 外部講師のよい点、ご苦労なさった点  
はありますか？

**庄司:** 学生は指導の経験が浅いので、教  
えてほしいことをまず伝えます。楽器の手  
入れの仕方、姿勢、扱い方の注意点などを  
指導してもらい、それからほんとうの音を  
知るために実際に吹いて聴かせてもらいま  
す。また、子どもは楽器が壊れていてもそ  
ういうものだと思って一生懸命吹こうとす  
るので、「プロが吹けない楽器を子どもが



吹いている」ということが起こらないよう、  
全員の楽器を点検してもらいます。きちん  
とメンテナンスしないと子どもがいない  
苦勞をしまいます。

**V:** やはり先生がすべて背負い込むので  
はなく、専門性の高い方に協力していただ  
くことも大切ですね。

**庄司:** 私自身も講師の方から教わっています。

**V:** 指導者自身も学びの機会になっている  
のですね。

**庄司:** 外部講師に任せきりにすると子ども  
からの信頼も薄れますし、私が外部講師と  
違うことを言わないようにしなければなり  
ません。

## 授業の先に吹奏楽団、全校 合奏がある

**V:** 都小音研での全校合奏の話に戻りま



すが、本番前、全体練習は何回ぐらい行い  
ましたか？

**庄司:** 3回です。担任の先生に時間をいた  
だくのは申し訳ないので、音楽の時間だけ  
で3回と決めておきました。聴くこと、合わ  
せることが低学年の頃からできているの  
で、3回でできました。

**V:** 授業時間の中でやりくりされたのです  
ね。模範演奏などはかなり聴かせましたか？

**庄司:** 同じ調のCDを模範演奏として聴か  
せましたが、テンポも速いですし、あくま  
でこういうイメージでという程度の1回だ  
けです。それよりも各学年をきちんと仕上  
げてから全体で合わせるために、本番のテ  
ンポで弾いたピアノの音源をCDに入れて、  
担任の先生に「時間があったら朝か帰  
りの会で練習してください」とお願いしま  
した。そこが大きな力になったと思います。  
練習は3回しかなかったのですが、本番の  
テンポのCDで練習しておけば大丈夫だ  
とっていました。

**V:** 子どもたちが身体でリズムを表現して  
いたのは、庄司先生の指示ですか？

**庄司:** いいえ。私は「身体を動かさず  
にしっかりと聴いて合わせないといけない」  
と思っていましたが、講師で来ていただ  
いたトランペット奏者の水口透先生から「音  
楽は身体でリズムを取らないと合いません。  
身体でリズムを取って合わせるように  
してください」とご指導を受け、動きを付  
けました。

**V:** 音楽と見栄えとが合致していました。  
子どもたちが裏拍を取っている姿に、聴い  
ている側も前のめりになって応援してしま  
いました。

**庄司:** その根底にあるのは、2年生の教科

書にある「1・2、1・2」「1・2・3、1・2・  
3」のリズム学習です。それが身に付いて  
いないとリズム感やフレーズ感は養えな  
かったと思います。だからこそ、あの子た  
ちはリズムにのって演奏することができた  
のだと思います。

**V:** 教科書の学習が活かされていてうれ  
しい限りです。

**庄司:** 年3回、クラス全員の前で1人ずつ  
試験で歌わせています。友だちが歌ってい  
るのを聴くことで「こういうふうに歌えば  
いいんだな」ということを理解していて、  
高学年になっても全員がみんなの前で  
堂々と歌います。

**V:** そのように主体性を育てていらっし  
やるのですね。

**庄司:** 3年生からはその間に教科書の簡  
単な曲を写譜させていますが、写譜をする  
ことで、音符やリズムが読めるようになり、

楽譜が身近になってきます。そして吹奏楽  
団に入っても楽譜に拒否反応を起こさず、  
読むようになります。また、簡単な旋律づ  
くりをしたときも楽譜にすることができま  
すし、そうして自分のつくった旋律を演奏  
する活動は楽しいと言ってくれます。音楽  
の授業の先に吹奏楽があって、全校合奏  
につながっているのだと思います。

**V:** 音楽には発表の場があることも大事  
ですね。

**庄司:** 「演奏して満足」するだけではなく、  
「聴く人も感動させる」こと、そしてそこ  
で「時空を共有し合えた」ということがと  
ても大切な経験だと考えています。

**V:** 外部講師の方たちと子どもたちのコ  
ミュニケーション、保護者への発表の場な  
ど、これからの学校教育のひとつの理想的  
な在り方だと思います。本日はありがとう  
ございました。



**清水健一先生**  
武蔵野市立第一小学校校長



授業において、頭声的発声でのびのびと  
美しい声で合唱する子どもたちや、それぞ  
れの音を聴き合いながら楽しそうに合奏す  
る子どもたちの姿を見ていて、庄司主任教  
諭の音楽指導にかける情熱と抜群の指導力  
を感じます。また、吹奏楽団の指導では細  
部までこだわりをもち、子どもたちが達成  
感をもてるようにしています。吹奏楽団の活  
動を通して子どもたちには、協力の大切さが  
浸透し、思いやりの気持ちが育っています。  
音楽を通して子どもたちに豊かな感性を  
培うとともに、全人教育を推進する庄司主  
任教諭は本校の宝です。

# 授業者に訊く—②



中学校は、芝学園でのヴァイオリンの授業と合唱コンクールについて、授業者の橋本先生と、両取り組みを主導なさっている鈴木先生からお話を伺いました。カメラを向けると照れてしまう、中学1年生の男子たちの取り組みをご覧ください。

授業者：橋本武士 (学校法人芝学園 芝中学校 芝高等学校)  
取材協力：鈴木太一 (学校法人芝学園 芝中学校 芝高等学校)

## リズムが基本

**Vent(以下V)**：男子校でのヴァイオリンの授業ということで、とても楽しみに伺いました。まず、5分授業の最初20分ぐらいを使って「芝リズムスクール」をなさっていましたね。簡単なリズム穴埋め聴音から、4小節のリズム聴音まで、生徒たちの熱心さに感心しました。リズムについては、かなり重点的に取り組まれているのでしょうか？

**橋本**：僕が赴任する前からの伝統で、音楽に興味はあるけれど楽譜が読めない生徒のためにも取り組んでいます。中2ではボディーパーカッション、中3では和太鼓や合奏も扱いますので、リズムは基本です。

**鈴木**：男子ばかりでエネルギーがあり余っているし、身体を動かしながら音楽と接することができればいいなと思っています。座学の授業でのフラストレーションを発散するような意味合いもあります。ドレミで読譜を扱うと音の高さや表情記号などいろいろ出てきますが、リズムはとてもシンプルです。リズムだけでも一つの音楽をつくれますから、そういう気付きも生徒にとってはおもしろいようです。

**V**：楽譜を読める、読めないに関しては多くの先生が苦労されているところだと思います。難しいリズム聴音がスラスラできている生徒もいましたね。

**橋本**：ほんとうはできているのに、「できている」と手を挙げない生徒もいるんですね。自信がないと感じている生徒もいますし、人目を気にするんです。

## 少し高めのハードルを設定する

**V**：ヴァイオリンは、もう何年も取り組んでいらっしゃるのですか？

**鈴木**：ここ4～5年の活動です。

**V**：楽器を買いそろえるのは大変ではなかったでしょうか。

**鈴木**：学校側と相当交渉しました。最初は「ヴァイオリンは難しいし、無理でしょう」と言われていたのですが、どうにか。

**V**：その難しいヴァイオリンをなぜ選んだのですか？

**橋本**：ハードルを上げたかったのです。

**鈴木**：できないと成績がつかないとなれば、生徒はどうしたらいいのかと考えます。ハードルが高すぎると諦めてしまうので、何とか乗り越えられそうなものを常に設定して、彼らの成長を促しています。

**V**：実際の楽器の指導はどのように進めていらっしゃいますか？

**橋本**：1学期にはプロの弦楽四重奏団をお呼びして、教室コンサートとして全クラスで演奏していただき、そのときに「弓はこういうふうにつつんだよ」などと教えて

## 自分たちで考えて、つくり上げる

聞き手：ヴァン編集部

もらいます。みんな刺激を受けていますね。  
**鈴木**：やはり本物の音を伝えなければいけないという思いがありますので、生演奏を聴く機会を設けています。

**橋本**：ホールなどではなく実際に近くで見られるので、演奏者の視線や息、空気感などについての感想を書く生徒もいます。

**V**：よく見えていますね。ヴァイオリンを導入されて何か変わった点がありますか？

**鈴木**：以前、器楽はリコーダーをメインに扱っていましたが、リコーダーだとチャンバラが始まってしまうんですよ(笑)。ヴァイオリンは扱い方にも注意が必要ですし、物を大事にする気持ちを育てる意味でも、授業を進めやすくなりました。

**橋本**：鑑賞でオーケストラの映像を観たときの反応も変わりました。ヴァイオリン協奏曲を観たときに、「あの人の指すごい」と言っています。

**V**：見るところが変わりますね。

**橋本**：なぜ弓がそろっているのかという疑問から、ポウイングについての説明もします。

**V**：調弦は、生徒が自分でするのですか？

**橋本**：いえ、ペグを触らせると弦が切れてしまうことも多いので、音が変になったら持っておいでと言っています。

**V**：友達と音を聴き合って確かめている生徒もいました。そういうコミュニケーションも大事ですね。

**橋本**：インプットだけの授業にはしたくないので、アウトプットもどんでんできるように実技をたくさん行います。高校生は三線も扱います。修学旅行は沖縄へ行くので、現地の方との交流の際に、『島人ぬ宝』などを弾くとびっくりされます。

**V**：音楽の授業を超えてコミュニケーションしたり、興味が広がったりするのはいいことですね。

## 勢いのよさとけじめを大事にする

**V**：男子校ならではの苦勞はありますか？

**鈴木**：エネルギーがあり余っている生徒たちには苦勞することもあります。男子だけだと勢いでいけるようなところもあ

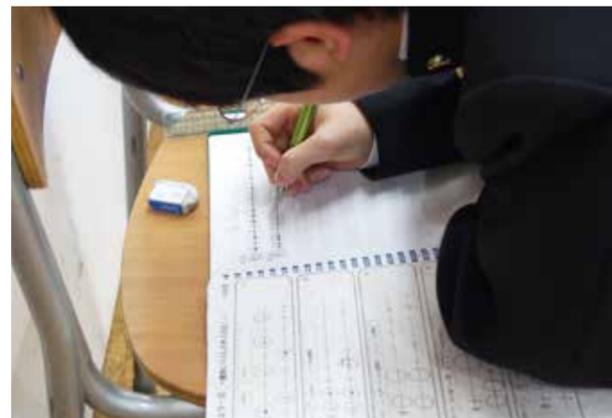


○はしもと・たけし  
学校法人芝学園 芝中学校 芝高等学校芸術科教諭

て、「やろうぜ!」「おう!」というのは男子校の持ち味です。彼らの雰囲気を生かしつつ、やらなければならないときにはきちんとけじめをつける。そういうことをどの先生方も考えながらやっていると思います。

**V**：授業を拝見しているとき、ヴァイオリンに向かっているときはみんな集中していましたね。

**橋本**：よくも悪くも素直なので、つまらなそうな顔をしていたら、僕の授業がつまらなかつたんだと分かります。気付かされる





○すずき・たいち  
学校法人芝学園 芝中学校 芝高等学校芸術科教諭

ことや勉強になることも多いですし、そのあたりを工夫すると自然に取り組んでくれます。

**V:** 授業のもっていき方ですね。

**橋本:** 単純だなと思います(笑)。男子はつまらないときははっきりしています。

**鈴木:** うまくコントロールすることには苦勞もありますが、おもしろいところもあります。

## 中1男子だけの合唱コンクール

**V:** 今度は芝学園で昨年11月に行われた合唱コンクールのお話を伺います。橋本先生が作曲された課題曲に、7クラスそれぞれがオリジナルの歌詞を付けて歌うという、たいへん特色ある活動ですね。

**鈴木:** 教員それぞれの持ち味を授業に生かせば、伝わるものも大きいのではと思います。橋本先生にお願いしました。曲をつくっているとき、橋本先生がとても生き生きされていたので、いいことをしたなと思っています(笑)。

**V:** 大事ですね。生徒たちもそういう部分は感じているのではないのでしょうか。

**橋本:** こちらがいやいや授業をしていると、生徒たちも気持ちがのらない。僕が楽しくて生徒も楽しいと、お互いハッピーです。今回、合唱曲の作曲は初挑戦でしたが、ピアノが苦手な生徒でも伴奏しやすいようなアレンジで、中1の変声期に男子校でも歌いやすい音域の曲にしようと思って作りしました。

**V:** さらに歌詞を子どもたちに考えさせるという発想が、すごいですね。

**橋本:** 本校では中高6年間を通してクラス対決をする機会が合唱コンクールだけで、あとはほぼ縦割りなんです。合唱コンクールは中1のみの参加ですし、彼らにとってたった1回きりの合唱コンクールなので、思い出に残るものにしたいという思いもあります。コンクール後にアンケート



をしてみると、「違う考えをもつ人たちとぶつかり合うこともあったけれど、本番が近くなるにつれて、みんながまとまってきた」という感想もあったので、ねらいは達成できているのかな。

**V:** 生徒による作詞は今年初めての試みだったそうですが、生徒たちの歌詞をご覧になって、率直にどのような感想をおもになりましたか？

**橋本:** このまま素直に成長してくれたらいいなと思いました(笑)。「誰かの言葉より自分の言葉を信じよう」なんて、年頃の生徒は絶対言わないですよね。これを僕が担当している高校のクラスで歌ってみたら、「この歌詞、恥ずかしくすぎます」と言っていました。「不安だった入学 ドキドキの僕の心に」とか(笑)。

**V:** 歌詞の表現に初々しさがありますね。

**橋本:** クラスごとの色がよりはっきりと見

えましたし、担任の先生方もいろいろと協力してくださって、そのコミュニケーションや連携もおもしろかったです。

## 責任をもって自分たちの曲を仕上げる

**V:** 歌詞づくりはどのように進められましたか？

**鈴木:** 最初にデモ音源と歌詞の文字数を書いたもの(フレーズに合わせてマス目をつくったもの)を生徒に渡し、テーマを決めさせました。どういう言葉でどういうストーリーを思い浮かべるかということを考えながら書いたようです。時期としては、2学期からスタートしました。

**橋本:** 歌詞をつくりたい人を2、3人ぐらい募って、彼らが考えたものをパーツごとに合体させたクラスもありましたし、ずっと2人で一緒に考えたクラスもありました。

**V:** 途中でアドバイスをされたのですか？

**橋本:** 今回は曲に歌詞を付けるという順番だったので、彼らがつくった歌詞で歌にくい部分や不自然な部分を指摘しました。アウフタクトの音符が、前のフレーズの最後の言葉になっていることもありしたので…。

**鈴木:** 助詞1つでも、「で」なのか「に」なのか「が」なのか、音にはまりやすい助詞を考えたクラスもありました。

**V:** そこまで意識して向き合えるようになるのですね。

**橋本:** 強弱や表情記号が一切ない楽譜を渡しましたので、クラスによって強弱も盛り上がる場所も違いましたし、テンポもそれぞれでした。全体としては前向きな曲に

なるよう心がけましたが、中間部の「悩むような部分」には、ほとんどのクラスで“試練があった”“泣いていた”“つらいときもあるけれど”という歌詞が付ききました。

**鈴木:** 「暗い感じになる」などの音楽の仕組みは、特に生徒には伝えていませんが、音楽を感じ取ってストーリーをつくっているのが分かってうれしかったですね。

**橋本:** 練習のときにふざけたりしていても、クラスメイトが歌詞をつくった曲だと言うと、納得して練習していました。

**V:** 自由曲の選曲はどうなされたのですか？ プログラムを拝見すると、ほぼ今どきのポピュラー曲ですね。

**鈴木:** こちらから自由曲の候補リストを渡して、その中から選ばせました。以前はオーソドックスな合唱曲とポピュラー曲を混在させていましたが、結局耳なじみのある曲、ふだん聴いている曲を歌いたいと言います。その歌いたい気持ちがモチベーションにつながることを期待して、今年はポピュラー曲だけのリストをつくりました。

**V:** 生徒のやる気や自主性を引き出す行事ですね。

**橋本:** はい。「自分たちで選んだ曲なのだから、最後まできちんと責任をもって」と言うと、自由曲も表現を工夫して歌うようになりました。



武藤道郎 先生  
学校法人芝学園 芝中学校 芝高等学校校長  
※平成29年4月着任

特集 1

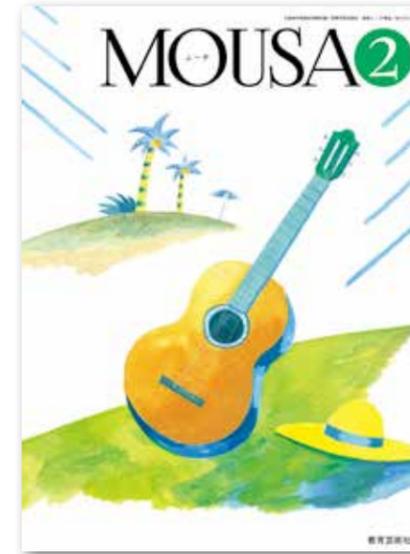
# 新しい高等学校 芸術科 音楽Ⅱの教科書

～音楽授業における“深い学び”の実現を目指して

平成30年度から使用される高等学校 芸術科 音楽Ⅱの教科書をご紹介します。  
高等学校における芸術科 音楽の履修はⅠを中心としている現状があり、Ⅱを学ぶ生徒の数は全国的に見ても少なくなっています。  
とはいえ、弊社は音楽Ⅱの教科書づくりに最大限の情熱を注いでいる、と言っても過言ではありません。  
高等学校の先生のみならず、小学校や中学校で指導される先生方にもぜひご高覧いただきたく、特集としてお届けします。



p.6・7 目次



p.2・3 目次

## ✿ 編集のポイント

### 高校生の音楽 ②

Q 「音楽Ⅰ」からの系統性は？

A 「音楽Ⅰ」と同じく  
教材選択型。

目次は分野ごとに色分けしてまとめているので、教材が選択しやすくなっています。

Q 大きな特徴は？

A 鑑賞の充実。

「音楽Ⅰ」の編集段階から構想を練り、西洋音楽の鑑賞曲全てを刷新しました。

Q 「音楽Ⅰ」からの系統性は？

A 「音楽Ⅰ」からの  
発展型。

1年生で学習したことを一歩進めた内容になっています。

Q 大きな特徴は？

A 歌唱、器楽、創作、  
鑑賞のバランス。

学校現場のアイデアを生かし、活動を促す紙面となるよう工夫しました。



編集のポイント

# 高校生の音楽②

# 『春の祭典』と『白鳥の湖』

# MOUSA②

## 『春の祭典』

音楽史上、一大事件となった『春の祭典』。初演がなぜ大騒動となってしまったのか、音楽の要素やバレエの演出などから深く考え、学び取ることができる材料をそろえました。



p.46・47



p.48・49

複雑なリズムや不協和音を  
実際に体験してみるコーナー  
も設けました。



### その他の鑑賞曲では…



p.32・33

p.34・35

## 時代を超えて鳴り響く《怒りの日》

グレゴリオ聖歌の《怒りの日》の旋律が使われているさまざまな作品を紹介しています。音楽と文学、美術、歴史との関連を扱うなど、横断的学習にも活用することができます。



## 『2台のピアノのためのソナタ 二長調』

(ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト 作曲)  
曲の特徴を理解しやすいよう、  
部分ごとに細かく解説しています。

TVドラマ  
『のだめカンタービレ』でも  
印象的なシーンに使われた  
名曲です。



p.38・39

## 『白鳥の湖』

誰もが一度は聴いたことのあるメロディーですが、その作品の全体像を知っている人は意外に少ないのでは？ MOUSAではバレエ全幕を鑑賞し、この人気曲をあらためて学習することを提案しています。



p.54・55



p.46・47

名曲のテーマを  
リコーダーでも演奏  
できるようにアレンジ  
して掲載しました。

### その他の鑑賞曲では…

## 『ヴァイオリン・ソナタ イ長調』

(セザール・フランク 作曲)

音楽に対する深い学びを実現すべく、こうした作品をしっかりと鑑賞できることを課題にして、紙面構成を考えました。



p.96・97

鑑賞のポイントを分かりやすく  
提示しました。

## クローズ・アップ・マエストロ

モーツァルト(MOUSA①)の次に取り上げたのは、ベートーヴェン。偉大な作曲家の人間像と作品の数々に鋭く迫り、生徒たちの興味・関心を深めます。



p.103～105

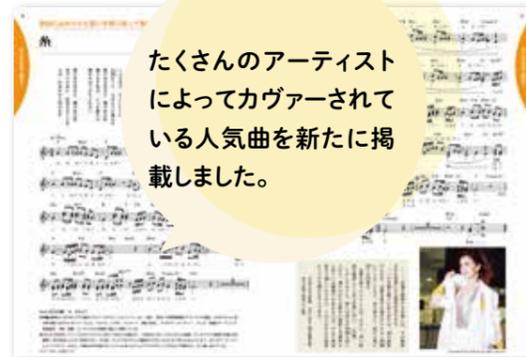


# 高校生の音楽②

# MOUSA②

## 『糸』

中島みゆきさんの著書から「言葉」にかかわる一部分を抜粋して紹介するなど、歌うことへのモチベーションを高める工夫をしています。



たくさんのアーティストによってカバーされている人気曲を新たに掲載しました。

p.8・9



p.20・21

## 『愛の讃歌』

フランス語の歌唱曲として『アヴィニョン橋の上で』から変更しました。フランス語らしい発音のポイントや、エディット・ピアフのプロフィールも掲載しています。



p.22・23

## 『Stand By Me』

器楽は「1曲をマスターする」という方針で教材を厳選しています。『Stand By Me』は3パートによるギターアンサンブルです。生徒の実情に合うよう編曲を工夫しています。特にベースラインのパートが好評です。



p.28・29

p.30・31

## BGMをつくろう

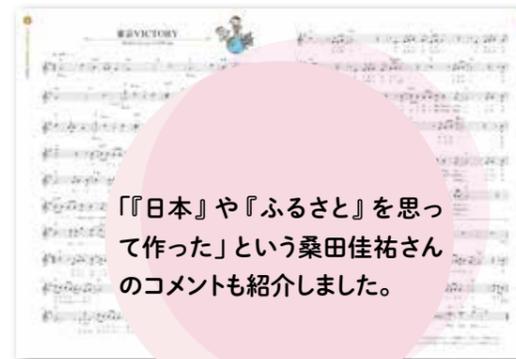
サウンド系、メロディー系の2つのタイプに分け、ステップを明示して取り組みやすくしています。

生徒の興味・関心を引き出し、充実した創作活動が行えるよう工夫しました。



## 『東京VICTORY』

サザンオールスターズが2014年に発表した楽曲です。この曲では象徴的に「東京」という言葉が使われています。



p.6・7

「『日本』や『ふるさと』を思っ  
て作った」という桑田佳祐さん  
のコメントも紹介しました。

## 『楓』

スピッツが1998年に発表した楽曲で、多くのアーティストによってカバーされているほど人気のある曲です。



p.20・21

歌い継がれるJ-POPとして  
新たに掲載しました。



## 『Alleluja』／ソルフェージュ

前回の『Ave Maria』からモーツァルトの『Alleluja』に変更しました。1年生で身に付けた発声の基礎をさらに発展させて学習します。ソルフェージュは、音楽の基礎的な能力の定着を図れるよう、課題を工夫しました。



p.4・5

p.22・23

## メロディーの雰囲気を変化させよう／演奏スタイルを変化させよう

歌唱教材の『Amazing Grace』を用いた創作活動です。「変奏」「編曲」することを目指し、具体的な例を示して一人でも多くの生徒が無理なく取り組めるよう工夫しました。



p.58・59



# 高校生の音楽 ② 掲載曲

	曲名	作詞	作曲	編曲
歌唱	糸	中島みゆき	中島みゆき	佐井孝彰
	何度でも	吉田美和	中村正人、吉田美和	三宅悠太
	Imagine	ジョン・レノン	ジョン・レノン	佐井孝彰
	見上げてごらん夜の星を	永 六輔	いずみ たく	鹿谷美緒子
	からたちの花	北原白秋	山田耕筰	
	うつろの心	作詞者不明/畑中良輔(日本語詞)	ジョヴァンニ・バイジェッロ	
	子守歌	A.v.アルニム、C.フレンターノ、G.シェーラー/武内俊子(日本語詞)	ヨハネス・ブラームス	
	愛の讃歌	エディット・ピアフ/岩谷時子(日本語詞)	マルグリット・モノ	三宅悠太
	『一谷嫩軍記』《組討の段》から	並木宗輔	並木宗輔	
	早春賦	吉丸一昌	中田 章	中田喜直(伴奏編曲)
	浜千鳥	鹿島鳴秋	弘田龍太郎	
	カタリ カタリ	リッカルド・コルディフェッロ/徳永政太郎(日本語詞)	サルヴァトーレ・カルディッロ	
	優雅な月よ	作詞者不明	ヴィンチェンツォ・ペッリーニ	
	愛の喜び	作詞者不明/畑中良輔(日本語詞)	ヨハン・パウエル・エギーディウス・マルティナーニ	
	女心の歌	フランチェスコ・マリア・ピアーヴェ/堀内敏三(日本語詞)	ジュゼッペ・ヴェルディ	佐井孝彰
	セレナード	ルートヴィヒ・レルシュタープ/野口歌介(日本語詞)	フランツ・シューベルト	
	君を愛す	ハンス・クリスティアン・アンデルセン/フランツ・フォン・ホルシュタイン(独語詞)/小原祥子(日本語詞)	エドヴァルド・グリーグ	
	夢のあとに	ロマン・ビュシーヌ(仏語詞)/関根敏子(日本語詞)	ガブリエル・フォーレ	
	夏は来ぬ	佐佐木信綱	小山作之助	三宅悠太
	流浪の民	石倉小三郎(日本語詞)	ローベルト・シューマン	
	いざ起て戦人よ	藤井泰一郎(日本語詞)	ジェームズ・マクグラナハン	編曲者不明
	アヴェ ヴェルム コルプス	作詞者不明	エドワード・エルガー	
	Shall We Dance?	オスカー・ハマースタイン2世/架我主門(日本語詞)	リチャード・ロジャーズ	加賀清孝
	雨にぬれても	ハル・デヴィッド	バート・バカラック	藤原嘉文
	器楽	Stand By Me	ベン・E.キング、ジェリー・リーバー、マイク・ストラー	ベン・E.キング、ジェリー・リーバー、マイク・ストラー
One			マーヴィン・ハムリッシュ	佐井孝彰
秋の宵			西川浩平	
America			レナード・バーンスタイン	藤原嘉文
Clapping Quartet No.2			長谷部匡俊	
ノルウェーの森			ジョン・レノン、ポール・マッカートニー	岡部栄彦
ロンド			ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト	北里康太郎
		曲名	作曲	
鑑賞	怒りの日		グレゴリオ聖歌	
	幻想交響曲 から 第5楽章 魔女の夜宴の夢		エクトル・ベルリオーズ	
	死の舞踏		フランツ・リスト	
	交響詩 死の舞踏		カミーユ・サン＝サーンス	
	交響曲第2番(復活) から 第5楽章		グスタフ・マーラー	
	バガニーニの主題による狂詩曲 から 第24変奏		セルгей・ラフマニノフ	
	ブランデンブルク協奏曲第2番 から 第1楽章		ヨハン・ゼバスティアン・バッハ	
	2台のピアノのためのソナタ 二長調 から 第1楽章		ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト	
	ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 から 第1楽章		フェリックス・メンデルスゾーン	
	オペラ カルメン から			
	《恋は野の鳥》《皆さんの乾杯に私もお返しをしよう》《おまえの投げたこの花は》《何も怖くないと言っただけだ》		ジョルジュ・ビゼー	
	管弦楽組曲『ペレアスとメリザンド』から《シシリエンヌ》		ガブリエル・フォーレ	
	バレエ音楽 春の祭典 から 春の兆し—乙女たちの踊り		イーゴリ・ストラヴィンスキー	
	文案『一谷嫩軍記』《組討の段》		並木宗輔	
	能『敦盛』		世阿弥	
	クンプ ソラ(セネガル)/ウラノ ヴィオ(ハワイ諸島)/チューニョの花が咲く頃に(アンデス地方)/カレワラの調べ(フィンランド)/カタカリ(インド)/ワヤン クリ(インドネシア)/コーン(タイ)			
	In the Mood		グレン・ミラー	
	Livin' on a Prayer		ボン・ジョヴィ	

# MOUSA ② 掲載曲

	曲名	作詞	作曲	編曲	
歌唱・器楽	Alleluja		ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト	内藤淳一	
	東京VICTORY	桑田佳祐	桑田佳祐	佐井孝彰	
	ハナミズキ	一青 窈	マシコタツロウ	内藤淳一	
	浜辺の歌	林 古溪	成田為三		
	椰子の実	島崎藤村	大中寅二		
	上を向いて歩こう	永 六輔	中村八大	河合紳和	
	糸	中島みゆき	中島みゆき	植村幸市	
	楓	草野正宗	草野正宗	三宅悠太	
	ソルフェージュ				
	Prelude I		三宅悠太		
	夏は来ぬ	佐佐木信綱	小山作之助	内藤淳一	
	Funiculi-Funiculà	ジュゼッペ・トゥルコ/青木 爽、清野 協(日本語詞)	ルイーダ・デンツァ		
	Nel cor più non mi sento	作詞者不詳	ジョヴァンニ・バイジェッロ		
	Vaga luna, che inargenti	作詞者不明	ヴィンチェンツォ・ペッリーニ		
	Nessun dorma!(オペラ《トゥーランドット》から)	ジュゼッペ・アダミ、レナート・シモーニ	ジャコモ・ブッチーニ		
	Après un rêve(夢のあとに)	ロマン・ビュシーヌ(フランス語詞)/門馬直衛(日本語詞)	ガブリエル・フォーレ		
	Sherry	ポプ・ゴードイオ	ポプ・ゴードイオ	植村幸市、三宅悠太	
	アンパンマンのマーチ	やなせたかし	三木たかし	植村幸市、三宅悠太	
	E-TEN-RAKU		作曲者不詳	植村幸市	
	情景(バレエ音楽《白鳥の湖》から)		ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー		
	冬 第2楽章《和声と創意の試み》第1集(四季)から		アントニオ・ヴィヴァルディ		
	ソナタ		ラファエル・コトヴィル		
	愛のテーマ(映画『ニュー・シネマ・パラダイス』から)		アンドレア・モリコーネ、エンニオ・モリコーネ	内藤淳一	
	Sehnsucht nach dem Frühlinge	クリスティアン・アドルフ・オーヴァーベック/宮澤章二(日本語詞)	ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト		
	Die Lotosblume	ハインリヒ・ハイネ/近藤朔風(日本語詞)	ローベルト・シューマン		
	夢やぶれて(ミュージカル《レ・ミゼラブル》から)	岩谷時子(日本語詞)	クロード＝ミッシェル・シェーンベルク	河合紳和	
	Amazing Grace	ジョン・ニュートン	アメリカの古い旋律	河合紳和	
	涙そうそう	森山良子	BEGIN	内藤淳一	
	ていんさくぬ花	沖縄県民謡	沖縄県民謡	澤田育子(楽譜構成)	
	ビルカ ビルカ	アイヌ民謡	アイヌ民謡		
	斎太郎節	宮城県民謡	宮城県民謡	藤原康行	
	祭の夢		西川浩平		
	長唄《越後獅子》から		篠田金治(?)	九世柗屋六左衛門	
	フラメンコのバルマ			福山昌美(楽譜構成)	
	愛のロマンス		スペイン民謡	岡村 繁(採譜)	
	Tears In Heaven	エリック・クラプトン、ウィル・ジェニングス	エリック・クラプトン、ウィル・ジェニングス	植村幸市	
	人生のメリーゴーランド		久石 譲	植村幸市	
	赤とんぼ	三木露風	山田耕筰	三宅悠太	
	秋のあじさい	星野富弘	なかにしあかね		
	はなざくら	大越 桂	佐井孝彰		
	幼き日のアルバム			横山潤子(構成・編曲)	
	鑑賞		曲名	作曲	
		あなたのとりに	ジョルジュ・アベール 作詞/ジャン・ルナール 作曲		
		シェリーに口づけ	ミッシェル・ボルナレフ 作詞・作曲		
		ラ・クンパルシータ	ヘラルド・マトス・ロドリゲス		
イバネマの娘		ヴィニシウス・ジ・モライス 作詞/アントニオ・カルロス・ジョビン 作曲			
マシュ・ケ・ナダ		ジョルジュ・ベン 作詞・作曲			
バレエ《白鳥の湖》		ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー			
琵琶楽 薩摩琵琶《川中島》		吉水経和 作詞/初世吉水錦翁 作曲			
文案《冥途の飛脚》から《淡路町の段》		近松門左衛門			
歌舞伎《京鹿子娘道成寺》		藤本斗文 作詞/初世柗屋弥三郎 作曲/初世柗屋作十郎 補曲			
モンゴルの民族舞踊(モンゴル)/タイの古典舞踊(タイ)/バリ島のケチャ(インドネシア)/バラタナーティヤム(インド)/セマー(旋回舞踊)(トルコ)/チャールダーシュ(ハンガリー)/フラメンコ(スペイン)/マサイ族の踊り(タンザニア、ケニア)/バヌアツの民衆の踊り(バヌアツ)/フラ(ハワイ)					
《和声と創意の試み》第1集(四季)から(冬)		アントニオ・ヴィヴァルディ			
《ヴァイオリン・ソナタ イ長調》から第4楽章		セザール・フランク			
オペラ《エジプトのジューリオ・チェザレ》から(もし私に憐れみを感じてくだらないのなら)		ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル			
オペラ《フィガロの結婚》から(もう飛ぶまいぞ、この蝶々)		ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト			
オペラ《セビーリヤの理髪師》から(今の歌声は)		ジョアキーノ・ロッシーニ			
オペラ《リゴレット》から(女心の歌)		ジュゼッペ・ヴェルディ			
オペラ《トゥーランドット》から(誰も寝てはならぬ)		ジャコモ・ブッチーニ			
《レクイエム》二短調		ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト			
《ルーマニア民俗舞曲》		ペーラ・バルトーク			
ドレスラーの行進曲による9つの変奏曲		ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン			
ピアノ・ソナタ第14番 嬰ハ短調《月光》から第1楽章		ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン			
交響曲第6番 へ長調《田園》から第1楽章		ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン			
弦楽四重奏曲第13番 変ロ長調から第5楽章(カヴァティーナ)		ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン			

新規掲載曲

# これからの学び②

## ～音楽科における深い学びとは

特集2

前号では、佐賀県教育センターの副島和久先生に、アクティブ・ラーニングの基礎知識や学校で学習活動を考える際のポイントなどを解説していただきました。

今回、新学習指導要領が示されたタイミングを受けて、あらためて副島先生に「深い学び」や「見方・考え方」などについてお伺いしました。先生方の授業づくりのヒントとなるお話をお届けいたします。

### 深い学びと「見方・考え方」

平成28年12月21日に公表された文部科学省中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」では、各教科で「見方・考え方」という表現が用いられ、論述されています。まず音楽科においてどのように整理されているか、確認することから始めたいと思います。

音楽科の学習において、教科の本質に根ざした「深い学び」を実現するためには、これらの「音楽的な見方・考え方」がたいへん重要になってきます。小学校、中学校、高等学校の全てに共通している次の2つのキーワード「感性を働かせる」「音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉える」について考えてみましょう。



#### 小学校音楽科

音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること。

#### 中学校音楽科

音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること。

#### 高等学校芸術科(音楽)

感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、芸術としての音楽の文化的・歴史的背景などと関連付けること。

#### ①「感性を働かせる」

子どもたちが音楽と出会い、聴き取り感じ取る(知覚・感受)ことが音楽学習のスタートです。これは、今までも大切にされてきたことで、それをあらためて示したものです。音楽を聴いても、子どもの心が動かないまま学習が進んでいくのは寂しいですね。自らの感性を働かせて音楽と向き合うことで、心を動かされる瞬間があり、相手に伝えたいという思いも芽生えます。これが音楽を学習するモチベーションの根源であり、「感性を働かせる」ことの最も本質的な部分だと思います。そのためには、まず先生自身が教材に深く向き合い、自らの心が動かされる体験をすることが大切です。教材となる楽曲のよさや魅力を実感し、「この曲でこういう授業をしたい」という思いを先生自身をもつことができなければ、子どもの心を動かすことはできません。「この教材を通して学ばせたいことは何か」ということをしっかりと精査したうえで、子どもたちと音楽とのすてきな出会いを演出し、子どもたちが主体的に音楽と向き合うことができる授業を考えることが大切です。

#### ②「音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉える」

音楽をまるごと捉えて、そのよさを感じ取ることはもちろん大切です。その一方で、音楽を少しだけ分析的に見てみると、音楽のよさやおもしろさ分かる場合もあります。例えば、「この音楽はタッカのリズム(付点のリズム)がたくさん使われているので、楽しく生き生きとした感じがする」といったようなことです。ただ、これまでの〔共通事項〕を支えとした学習をおおむね踏まえているものなので、特段の新



○そえじま・かずひさ  
佐賀県教育センター研究課 課長

しいことに取り組むわけではありません。現行学習指導要領のおかげで、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で音楽を捉える学習は、かなり学校現場に定着してきました。そこからもう一歩推し進めて、子どもが生涯にわたって音楽とかかわっていく際の大切な力となるようにしていきたいです。

「感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えた」先には、それが自分自身のイメージや感情とどのようにかかわり、生活や社会、伝統や文化と結び付いているのかを考えることが求められています。このことこそ、これからの音楽科の学習において、最も大切にされるようになると思います。

新学習指導要領の中では、「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められており、「アクティブ・ラーニング」という言葉は姿を消しました。アクティブ・ラーニングの考え方がさまざまに捉えられたり、決められた「型」があるかのように誤解されたりしていることへの警鐘かもしれません。アクティブ・ラーニングを形だけまねしても、学習する内容が魅力的で、子どもたちにとって「主体的に学びたい」「対話したい」と思えるものでなければ「深い学び」になることはありません。アクティブ・ラーニングの視点で授業を見直し、子どもの学びが主体的・対話的で、何より深い学びとなるように考えることが肝要です。

音楽科における「深い学び」を実現するためには、子どもたちが「音楽的な見方・考え方」をしながら学習に取り組むことが大切です。子ども一人一人の「見方・考え方」が深まることで、生涯にわたって、音楽と豊かにかかわっていくことができるような人になってほしいです。

## 音と言葉による コミュニケーション

「深い学び」を実現するためには「主体的」であると同時に「対話的」でなければなりません。

「対話的な学び」とは、“face to face”で実現されるものと考えます。音楽科では、これまでも「協働的な学び」というキーワードで大切にされてきました。このことはこれからも変わりませんが、ICT機器が飛躍的に発展し、ネット上でのやりとりが容易になった現代においてこそ、実際に顔を付き合わせて他者とかがかわることが大切です。友達や先生、地域の大人など、多様な他者と直接かかわることで、自らの考えを広げたり深めたりできるといいですね。

しかしながら、「対話的な学び」＝「話し合い活動」との誤解で、ついつい言語活動ばかりに注力しすぎて音楽から離れてしまった授業や、言葉で説明したり書かせたりすることが目的化してしまい、音楽科の目標がなおざりになってしまった授業を見かけることがあります。音楽は、音そのものを媒介としたコミュニケーションです。したがって、音楽科の言語活動では、音と言葉によるコミュニケーションが重要になります。実際に歌ったり、演奏したり、音楽を聴いたりすることと、言葉でのコミュニケーションの両方が大切にされ、バランスよく行われることが、音楽科の学習において大事にされなければいけません。芸術教科のよさは「知性」と「感性」の両方を働かせて学習する点にあります。「知性」だけでは捉えられないことを「感性」とかかわらせて捉えていけるこ

とが、芸術教科が担っている学びであると思います。このように、音楽科でしかできない、あるいは音楽科が多くウエイトを占めている部分があるはずです。それが学校や社会における音楽科の強みですし、同時にそこに意識を向けないと音楽科を含む芸術教科の存在意義が危うくなってしまいう危険性があります。

## 高等学校における 授業の質的な改善とは？

前回は、小学校と中学校における授業の質的な改善のお話をしました。今回は、高等学校について考えてみたいと思います。

### 授業の構成

高等学校では、学習指導要領を踏まえ、音楽という教科がもっている特性を生かして充実した授業を行われている先生がいらっしゃる一方で、そうではない先生がいらっしゃるのも事実です。全体的には、現行学習指導要領も十分には浸透していないのが現状ではないでしょうか。義務教育9年間を踏まえて、生徒の学びに目を向けた授業の質的な改善が図られていくことを期待しているところです。

高等学校の授業を展開していくうえで、の難点の一つとして、多様な生徒がいる中で進めていかなければならないことが挙げられます。小・中学校での成果を生かし、より深い学びを実現させることが求められていますが、そのためにはまず小・中学校で何

をどのように学んできたのかを十分に把握し、生徒の学習履歴を考慮した授業を構想することが大切です。その把握が十分でないために、生徒にとっての足りない授業になってしまうこともあるのではないのでしょうか。多様な生徒がいるため、どこに基準を合わせるのかは難しいところですが、小・中学校での学びをしっかりと踏まえることで、さらに深い学びが実現できると思います。当然、それまでの学びが不十分だと思われたときは、その実情に合わせて「学び直し」を含めた授業を組み立てる必要があります。

また、先生自身の興味や専門分野によって、領域・分野が偏ってしまっていないかという懸念もあります。生徒一人一人にも個性があり、領域や分野により得意不得意があります。だからこそ、限られた時間の中で、歌唱、器楽、創作、鑑賞の幅広い活動の場を保障することで、全ての生徒が生き生きと取り組むことができると思います。当然、音楽科の学習そのものが協働的であり、主体性を発揮できる可能性を多く秘めていますので、一斉指導だけではなく、先生の意図を明確に示したグループ活動などにも積極的に取り組まれていくとよいのではないのでしょうか。

### 評価と「見方・考え方」

高等学校の評価では、音楽科に限らず、技能的（できる／できない）、あるいは知識的（分かる／分からない）な側面に偏っており、意欲などの情意面への意識が薄いのではないかと思います。音楽科においても、もっと生徒の関心・意欲・態度や創意工夫を

的確に評価し、生徒にフィードバックしてあげることが大切なのではないのでしょうか。

今回の改訂で示された「見方・考え方」の中で、高等学校には「イメージや感情、芸術としての音楽の文化的・歴史的背景などと関連付ける」と記されています。生徒が小・中学校からしだいに視野を広げ、音楽とのかかわりを深めていくことで、音楽が価値あるものであると実感する大切な学びにつながるのです。

## まとめ

新学習指導要領が示されましたが、音楽科教育の本質的な部分は変わりません。むしろ、社会の変化に対応して、これまで大切にしてきたことをより明確に打ち出したものと考えられます。「アクティブ・ラーニング」という文言は姿を消しましたが、「主体的・対話的で深い学び」を実現するためにアクティブ・ラーニングの視点での授業改善が必要であるのは変わりません。これまでは、「何をどのように教えるか」という先生側の視点で見えてきたものを、今後は、子どもが「何をどのように学び、その結果、どのようなことができるようになるのか」ということに意識を向けた指導にシフトしていく必要があります。子どもが「アクティブ・ラーナー」となり、これからのどのような社会にも対応し立ち向かっていく力を身に付け、音楽のもつ役割や意味を考えながら、音楽とともに生きていてほしいと強く願っています。

次号では、新学習指導要領の全体像についてお伝えいたします。



パクンと考える

# ことば・ コミュニケーション



## 【第2回】 ココが違う、アメリカの学校生活！

お笑い芸人パクンマクンのパクンこと、パトリック・ハーランさんにお話を聞く連載第2回。  
今回は、パクンが育ったアメリカの学校生活について、教えていただきました。  
みなさんの授業のヒントとなるお話があるかもしれません！

### 学校生活全てが コミュニケーション

—学校生活で印象に残っていることはありますか？

**パクン:**いろいろ覚えています。まず日本と違う点は、自由度が高いことです。例えば朝礼のようなものがあると、日本では背の順に並び、規律よく整列するよう教育されていてすばらしいなと思います。一方、アメリカでは並ぶ順番は決まっていません。いつも立つ位置が違うから、毎日のように交渉になるんですよ。「お前、昨日はここだっただろ。譲れよ」「とんでもない、ここは僕の場所だ」って。そういう口げんかのようなものが多くても、結局はコミュニケーションです。規律がコミュニケーションか、てんびんに掛けているところもありますね。

また、授業でも「今日はこれをやります」ではなく、「さあ今日は何をやりましょうか？」と質問からスタートすることがよくあります。そして、教

科書を開かないまま授業が進み、「分かったかな？ 同じようなことは他にどこで見られるかな？ みんなそれぞれ探して、明日までにまとめてきて」と。そして翌日になったら順番にプレゼンする、という授業が多いです。これは僕の子どもが現在日本の小学校で受けている授業とは全く違います。どんな教科でも、質問からスタートする授業が多く、それが楽しかったです。

—好きな科目はありましたか？

**パクン:**全部好きでしたが、その中でも特に好きなのは理科でしたね。大学でも物理学を勉強しようと考えていたのですが、授業の内容が難しすぎるうえ、実験などで時間がかかりすぎると思って、文系に変えました。惜しげもなくすぐ変えられました。基本、勉強自体は全体的に好きです。昔も今も、本を読むことも文章を書くことも好きで、新しい語彙を覚えるのも好きです。でも日本のアイドルの名前を覚えることだけは、なかなかでき

ません。この仕事では大事なんですけどね。あと、唯一嫌いだったのは筆記体です。これだけはC評価を取りました。いまだに字が下手です。

### 先生との思い出

—好きな先生や思い出に残っている先生はいらっしゃいますか？

**パクン:**たくさんいます。この質問を受けてよく答えているのは、幼稚園の先生です。ある日、先生が「昨日うちの庭に、恐竜が横たわって死んでいるのを見つけたよ」と、靴箱のような箱を幼稚園に持ってきました。子どもはみんな「えっ、恐竜が!? 見たい見たい!」と興味をもちます。そこでパカッと箱を開けると、中に入っているのは鳥なんです。「実は、鳥は恐竜なの。恐竜が進化して鳥になったんだよ。足の付け根の部分や骨の部分を見てごらん。絶滅したといわれる恐竜の生き残りだとその形から分かるよ！ 触ってみる?」「触る! …なんで冷たいの?」「それは腐らないように先生が冷凍室に入れていたからだよ」と、子どもが興味をもつような語り口で、しかも全てストーリー仕立てで教えてくれました。

また3年生のときの先生は、いろいろな規律を教えてくださいました。僕は授業中も落ち着きがなかったのですが、先生が「動きたいのはよく分かる。先生もそういう子だった。でも今は授業だから、動きたいときは手を挙げて言ってください。そうしたら先生が何か指示を出します」と、僕に黒板掃除や窓開けといった仕事を与えてくれました。僕は仕事をしている自分が好きだったし、そのおかげでクラスの中でも授業に貢献している優等生になれました。ポジショニングがとても上手な先生でした。

### ことばを知る、ことばで伝える

—パクンは「ことば」で伝えるお仕事をされていますが、学校で教わったことで印象深かったことはありますか？

**パクン:**4年生のときの先生が“Lost in Language Land(言語の国で迷子になった)”というオリジナ



イラストレーション：小島真樹

ルのミュージカルを書いて、僕をその主人公にしてくれました。そのミュージカルの中では、形容詞は何か、名詞は何か、ということを歌うんですが、その経験のおかげで中学校や高校の文法の授業がすごく楽になりました。

それから高校の英文学の先生は、たいへん評価が厳しかったです。ある小論文課題が出されたときに、僕は理路整然と書いて提出したのですが、戻ってきた小論文には全く赤ペンが入っていないのにも関わらず、C評価だったんです。「どうして？ 見てください。友達の論文よりはるかにいいよ!」と言ったら、「友達の話じゃない、キミの話だ。キミの中でこれはCだから先生はCにした」と言われました。「この論文は練られていない。できているのは分かるけど、キミが一晚で書いたのが先生には分かる。1回目の原稿と2回目の原稿を比べて変わっているかを先生が見るから、せめて二晩かけて書いてごらん。そうしたらよくなるから。パトリックはこの程度じゃない。求められているものはもっと大きいよ」と、自分の基準の低さに先生が気付かせてくれました。最終的に授業はA評価をいただきましたが、何度も口げんかしましたね。もともとは先生から言われたことがきっかけでしたが、まとまっていなかったものがまとまると気持ちがよくなるし、それを怠ると文章に対する自分の思いも薄まってしまうから、今でも原稿を書き直すことは好きです。プライドをもって世界に発信できるものになります。



—先生とのエピソードがこんなにたくさんあるということは、それだけ学校でも意欲的だったのですね。

バックン：先生は大事です。いろいろ教えていただいたことは今でもしっかり覚えています。それから、学校だけではなく、マネージャーや社長、相方のマックン、それぞれの現場スタッフから教えてもらったことや、先輩芸人からのアドバイスを、全てが宝物だと思っています。きれいごとのように聞こえますが、ほんとうにそう思っています。

## アメリカの音楽の授業は？

—アメリカの学校での音楽の授業は、どのような感じですか？

バックン：アメリカは学区によって教育制度が異なります。州立の公立学校や私立学校、チャーター・スクール\* などがあり、音楽におけるスタンスはさまざまです。特にチャーター・スクールはバラバラで、音楽(アート)がメインの学校もあれば、全くない学校もあります。

—日本のように全国共通の教科として成立しているわけではないのですね。

バックン：今は、以前に比べて多様性があるので一概には言えませんが、僕の時代は、だいたいの公立学校で音楽は必修で、週1~2回ありました。一方、運動したほうが午後も集中できるということで、体育はほぼ毎日あったと思います。また、アメリカでは、音楽は楽しいぞ、演奏するだけじゃなくつくるものだぞ、という教え方が多いです。日本では「トントントン、はい」「トントントン」などと先生が打ったリズムをまねて繰り返しますが、アメリカでは「はい、次はあなたのリズムを、どうぞ」と、学生がリードして「トントントン」「トトトントン」のようにみんなが自由に考えて演奏しますし、楽器も「好きな楽器を取ってきて！」と言われます。

—日本では、授業でICT機器を活用する機会が増えていきます。アメリカではICT機器は活用されていますか？

バックン：まちまちですね。紙の教科書を使わず全部タブレットで授業を行っている学校もありますし、低所得者層の多い学校では、端末が全員に給付されているところもあります。賛否両論ありますが、日本よりは導入率が高く、作文やレポートを書くとき、小学校3~4年生までは手書きで

バックンの一言

### 2016年ノーベル文学賞

2016年ノーベル文学賞は、アメリカの歌手ボブ・ディランが受賞しました。僕はその世代ではありませんが、多くのアメリカ人の人生を変えた人物でもあるし、彼の歌詞は「詩」であると思うので、歌手がノーベル文学賞を受賞したということに全く異論はありません。ただ、日本の皆さんが納得いかないのも分かります。彼の詩は日本語に訳すとピンとこないことが多く、英語が堪能であってもニュアンスが分からないとなかなか通じないかもしれません。それよりも、早く村上春樹さんに受賞してほしいという思いも強いでしょうね。

すが、その後はもうパソコンを使っている学校も多くあります。

## メモを取らないのはもったいない！

—大学で講師を務めていらっしゃる伺いました。

バックン：僕は東京工業大で教えていますが、文科系の授業では、最初に学生に「ノートを取りなさい」と言っているんです。でも、パワーポイントで「ノートを取れ！」と出すと、そのまま「ノートを取れ！」とノートに写すんですよ。学生たちは、僕が言っていることをメモしないので、「前回に話した〇〇を覚えている？」と聞いても答えられない。それではもったいないと思うんです。メモを取ることは、日本の学校ではあまり指導していないのかな？ 次回の授業では、ノートを見ながらの試験を行おうと考えています。資料の持ち込みは禁止し、手書きのノートだけ許可します。パワーポイントを写真に撮っている学生もいますが、スライドには出さなかった内容を試験に出そうかなと思っています。

—確かに、日本では先生が口頭で伝えたことを自分なりにメモするというよりも、先生が黒板に書いたものをそのまま写すだけで、受身の場合が多いですね。

バックン：それは英語の勉強でも通ずるところがあって、しゃべっていて分からない英単語が出て



きて、メモを取る人が少ないんです。そもそも、日本のコミュニケーションスタイルとして、分からないことがあってもとりあえず相づちを打っておいて、あとで分かればいいかな、と思っているところがないでしょうか。アメリカでは、分からなかった瞬間、そこで会話を止めるんです。「今使った単語はどういう意味ですか？ 僕には理解できませんので、教えてください」というのがアメリカのスタイルで、「どういう意味かな？」と考えながらも聞き続けるのが日本のスタイル。それが原因で、英語の学習速度が落ちているようにも思うんです。たとえ会話を止めなくても、メモをしておいてあとで聞くことが大事です。



○パトリック・ハーラン Patrick Harlan

芸人・東京工業大学非常勤講師。1970年11月14日生まれ。コロラド州出身。93年ハーバード大学比較宗教学部卒業。同年来日。97年、吉田真と「バックンマックン」を結成。「英語でしゃべらナイト」「爆笑オンエアバトル」などで注目を集める。現在「外国人記者は見た+日本 in ザ・ワールド」でMCを務めるなど、多くのテレビ番組に出演。2012年10月より池上彰の推薦で東京工業大学非常勤講師に就任し、コミュニケーションと国際関係に関する講義も行っている。著書に『国際交流を応援する本 10か国語でニッポン紹介①~③』(岩崎書店)、『大統領の演説』(角川新書)など。

# 音楽とテクノロジー

— 新たなステージへ —

平田亜矢（武蔵野音楽大学講師）

皆さんは今、ふだんの生活の中で音楽をどのように聴いているでしょうか？ 若い世代には「CDプレイヤーの使い方を知らない」という人も出始めていると耳にします。

ヴァンでは2007年に発行したVol.10で「音楽と私たちの今後」をテクノロジーと絡めて考察しましたが、あれから10年たった今、「音楽と私たちとテクノロジー」はどう進んだのでしょうか？



『音楽教育ヴァン Vol.10』

## CDを捨てたApple

iPhoneでおなじみのAppleは、常に新しい時代を先取りし、先進的な機能、洗練されたデザインをいち早く世に送り出し、リーディングカンパニーとしての地位を不動のものとしてきた。

当初CDは、音楽を聴くためのメディアの位置付けのみであったが、後にPCのデータの記憶媒体としても、広く利用されるようになった(DVDについても同様である)。

ところがAppleは、2011年から、その当時PCに標準で搭載されていたCD/DVDドライブを、自社の製品については順次非搭載としていった。特に芸術にかかわる多くのユーザーに支持されてきたメーカーのAppleが、音楽の標準的なメディアであるCDを「捨てた」瞬間である。

## ネットショッピングの台頭

インターネットの普及は、人々の消費行動にも変化を与えている。総務省統計局の資料によれば、ネットショッピングを利用した世帯の割合は、2002年には5.3%であったが、2015年には27.6%と約5.2倍になっており、扱われる商品も年々広がりを見せている。その一つに書籍があるが、今ではインターネット上で内容の一部“立ち読み”も可能になっている。音楽の分野についても例にもれず、商品である楽譜の一部の閲覧や、CDの試聴ができる。

その影響を受けてか、CDショップ等の数は減少の一途をたどっている。ネットショッピングが繁栄を見せる一方で、経営が厳しくなり閉店したCDショップも多数あるのだ。

## 音楽クリエイターの出現

音楽テクノロジーの進歩により、楽器が演奏できなくとも、歌が歌えなくとも、音楽を表現したいという気持ちがあれば、音として出来上がった音楽作品を提供できるようになった。

音楽テクノロジーを用いて、音による音楽作品を提供する音楽家を、最近では音楽クリエイターと呼ぶ。音楽クリエイターは、DAW(通称「daw」。Digital Audio Workstationの略)と呼ばれる、コンピュータが中核となる音楽作成ツールを用いて音楽をつくる。音楽クリエイターは、リアルな音と合成された音を自在に操り、音楽作品を紡ぎ出していく。また、音楽のジャンルのみに縛られず、映像などに代表されるアートも含めて、一つの作品として完成させるといった、新しいスタイルのクリエイターも、すでに市民権を得ている。

現在、プロ・アマを問わず、さまざまなクリエイターが、自己の作品をインターネット上に公開している。

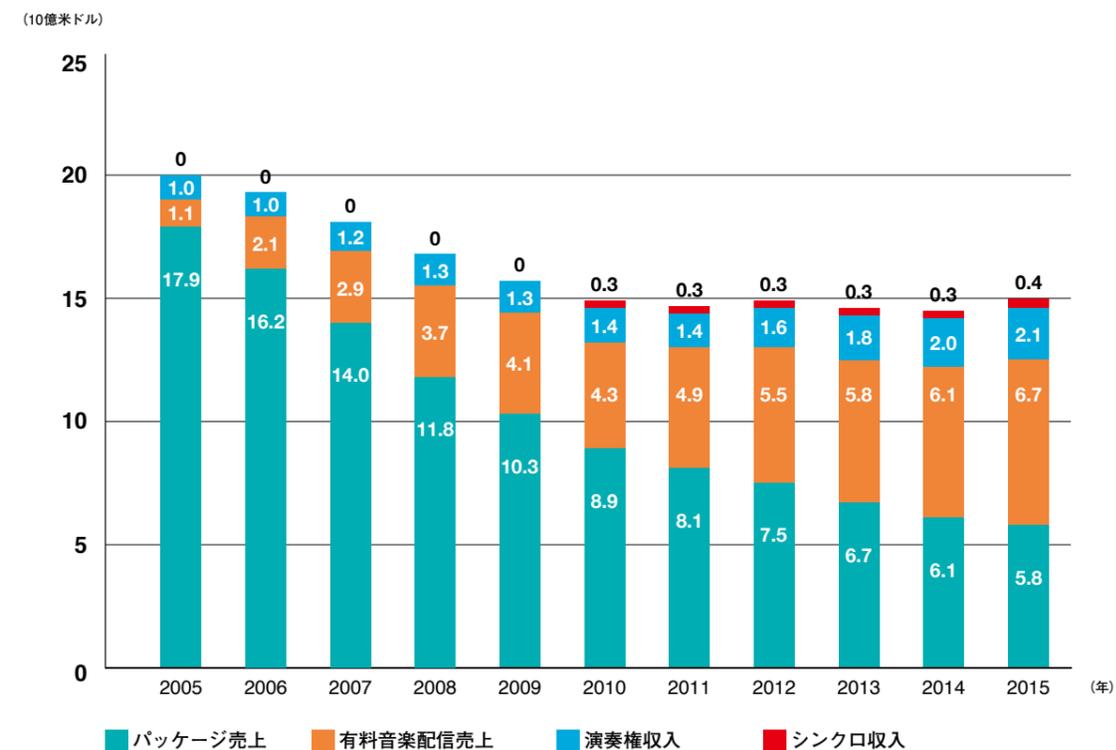
YouTubeは、世界でも有数の動画投稿サイトの一つである。かの有名なピコ太郎は、YouTubeを利用して最も成功した人物の一人に数えられる。2016年、ジャスティン・ビーバーが、Twitterで彼の作品を紹介したのをきっかけに、世界中の多くの人々が、ピコ太郎の『ペンパイナッポーアッポーペン(PPAP)』を視聴した。再生数は1億回を超えている。

実はこの快挙は、テクノロジーの進化に基づく「DAW」「インターネット」「動画投稿サイト」に支えられており、音楽の創造と拡散の両面において、新たな時代の到来を物語っているのである。

## 電送される音楽

国際レコード産業連盟によれば、2015年にインターネットを介した音楽視聴の売り上げが、CDやDVDなどの既存メディアによる音楽視聴の売り上げを初めて上回った。また、イン

## 世界音楽売上 金額の推移



国際レコード産業連盟(IFPI) 「Global Music Report 2016」より

ターネットを利用した音楽ストリーミングの分野では、2011～2015年の間に、4倍以上の成長がみられた。インターネットによる音楽視聴は、今後ますます一般的になっていくであろう。

インターネットによる音楽視聴が普及し始めた当初は、インターネットを介して、CDに収録されている音楽データを購入する方法が一般的であった。CDのリリースがまずありきで、購入方法の選択肢として、音楽データの購入があった。

ところがしばらくすると、この法則がくずれていく。CDはリリースせず、インターネット上で直接音楽データを販売する方法である。これは「デジタルリリース」と呼ばれ、音楽の新たな販売方法として、広がりを見せている。

また、インターネット上での音楽販売の方法にも変化がみられる。これまでの楽曲単位の販売ではなく、膨大な楽曲数を聴くことのできる権利販売の方法が現れた。「定額制の音楽配信」と呼ばれるサービスである。代表的なサービスとして、「Apple Music」「Google Play Music」「Spotify」等が挙げられる。それぞれがおおよそ月額1000円程度で、3000～4000万曲(日本国内では条件が若干異なる)が聴き放題となる。

利用者側は、たいへん便利で安価なサービスが現れたと好意的に受け止めているが、音楽の提供者側はどのように受け止めているのだろうか。

シンガー・ソングライターのスガ シカオは、自身のTwitterで次のように述べている。

「DL\*でももちろん嬉しいのですが、ぶっちゃけDLだとほとんど利益がないんだ。おれらみたいにスタジオで徹底的に音楽を追い込むタイプは、制作費が全部赤字になっちゃう。CD買ってもらうと、かなり制作費が補えるので、次の作品が作れるメドが立つんだよね。CD売れない音楽業界の負の連鎖だ」

全ての音楽家がそうであるとは言わないが、CDが売れなければ音楽活動に支障が出る音楽家も、中にはいるのだ。

\*ダウンロードの略で、ここではインターネットを介した音楽データの視聴を指す。

## iPadがもたらしたタブレットPCブーム

タブレットPC(キーボードがない携帯型コンピュータ)は、2010年のAppleによるiPadの市場投入によって一躍脚光を浴びるようになった。従来のノートPCにはみられなかった、優れた携帯性及び堅牢性から、パーソナルユースだけでなく、教育現場での導入も盛んになってきている。

スマートフォンも同様であるが、タブレットPCに利便性を見いだす鍵は、インターネットを含むネットワークに接続でき

るかどうかである。インターネットやネットワークからさまざまなデータをダウンロードして使うのが、タブレットPCの通常の使い方だからである。したがって、CDを読み込むためのCDドライブがないのはもちろんのこと、USBメモリはおおむね標準では使用できない。ちなみにiPadでは、外部メモリの装着さえも想定されていない。タブレットPCで音楽を聴くには、あらかじめ他の機器で音楽データを準備して転送するか、インターネット経由のダウンロードやストリーミングのサービスを利用する必要がある。

## 音楽の今、これから

ネットワークの深化によって、音楽社会はこれまでに経験したことのない、新たなステージに入った。見方によっては、何千万という楽曲を聴きたいときに聴くことのできる環境を、我々は手にしたのである。エジソンの蓄音機から始まったオーディオの進化は、デジタル技術の申し子であるCDを経て、MP3に代表されるメモリーオーディオに至った。そしてiPadが発売されて以降、スマートフォンの普及ともあいまって、音楽配信による音楽の提供が、急速な勢いで広がりつつある。

まだしばらくの間は、この世から完全に消えることはないであろうが、かつてレコードがたどったのと同じ運命を、CDは歩み始めたのかもしれない。少なくとも、「定額制の音楽配信」が、音楽の視聴方法の中心に近づいていくことに、間違いはないのである。

平田亜矢 ひらた・あし  
新潟生まれ。武蔵野音楽大学大学院音楽研究科音楽教育専攻修了。修士(音楽)。現在、武蔵野音楽大学講師。研究フィールドは、音楽テクノロジーと音楽教育とのかかわりである。

教育芸術社の合唱曲は以下の音楽配信サービスからもご利用いただけます。詳しいご利用方法については各サービスサイトをご確認ください。

また、配信楽曲のラインナップは各サービスによって異なります。

iTunes Store・Google Play Music・Amazon Music・mora・music.jp・mysound・LINE MUSIC・レコチョク・ドワンゴジェイビー

新作も既刊商品も  
続々アップ中!

Music Download

## THE CHORUS シリーズ

クラス合唱や全校集会、コンクール自由曲向けの新曲を収録。

ダウンロード参考価格：1曲税込み ¥250

同声編、女声編、混声編

同声編、混声/女声編

同声編、混声/女声編

同声編、混声/女声編

同声編、混声/女声編



## Chorus ONTA シリーズ

混声合唱のためのパート練習用CD。配信版ではパートごとに購入可能。

ダウンロード参考価格：1曲(パート) 税込み ¥150

NEW



4月下旬配信開始予定

## Spring Seminar シリーズ

新作合唱曲による公開講座「Spring Seminar」で演奏された、同声、女声、混声各2曲を収めたアルバム。

ダウンロード参考価格：1曲税込み ¥250



お知らせ

教育芸術社のホームページが新しくなります。どうぞご利用ください。(4月25日 リニューアル予定)

